

谷村和典
(谷村鯛夢)

24

俳人編集者の四季

鯉来る大土佐晴れの濤高し

◆土佐と鯉の俳句

今通も、素直にカツオ関連の話題で書き進めてみる。

まず、僕も現代俳句界の一隅にいる人間なので、夏の季語「鯉、堅魚、松魚」で詠まれた句から好みの幾つかを紹介しておきたい。

藍凝つて銀を生ずる鯉かな

松根東洋城

東洋城は夏目漱石の門下生で松山の人。正岡子規の「ホトトギス」で有力俳人となったが、のちに高浜虚子と別れ、一家を成した。海の藍色の結晶が銀色の鯉だという鮮やかなイメージ。文学的香りの高い一句で、すっきり感がいい。

鯉来る大土佐晴れの濤高し

福田甲子雄

海なし県山梨の俳人がこう詠んでくれたことがうれしい。

断つほどの酒にはあらず初鯉

曙羽狩行

現在の俳人協会会長。禁酒しなければいけないほどの大酒飲みではないが、という断りから入るところに俳諧味がある。そして、そのことで酒は大好きだということ

つるつる

サトミさんが話す。

義母が粉をこね、足で踏んで、と奮闘する。私がか

典

イラスト・とまた かずひこ



日本を代表するおしゃれな街・銀座にある高知県のアンテナショップ「まるごと高知」で、新しい県産品に囲まれて山西金陵堂の「松魚つぶ」は風格さえ漂わせている

を伝え、だから酒肴としての初鯉がうれしい、ということも伝えてくれる美に巧みな句。思わず「うまい」と言いたくなる。

この句の酒と鯉は独酌の楽しみといった印象が強いが、これが土佐だとどうなるか。たたきの大皿を交えた血鉢での「おぎゃくだ」。

昭和の有名俳人で、能楽の家の人らしい雅で格調の高い句柄で知られる松本たかしが、高知で次の一句を残してくれた。

主客豪酒春燈の下血鉢あり

賑やかで豪勢なおぎゃくの様子がありありと浮かんでくる。なにしろ、主も客も豪酒。ものすこい酒飲みだといふのである。酒をぐいぐい飲み、たたきもガンガン食べ、かつしゃべる。酒が強いだけの「酒豪」ではない。飲みっぷり、その場の空気も含めて「豪酒」なのだ。

ここで、お聴かしい話を記しておこう。平成20年に1年かけて小学館から刊行された「週刊百科日本の歳時記」の編集に関わったときのこと。幾つかの企画を手掛けたが、「行ってみたい吟行地」連載で「土佐路 彦戸岬から足摺岬」の回の大ミス。土佐関連の俳句として松本たかしの「主

客豪酒」の句を見つけた僕は、一読して「主客酒豪」と思い込んでしまった。

「豪酒」という措辞はそれまで見たことがなかったし、こういう場合の熟語は「酒豪」しか思い浮かばなかった。思い込みは、いけない。ミスの元。読者の皆さんには申しわけないが「主客酒豪」のまま校了してしまった。謝るしかない。

そして、それらの本の中で「土佐と鯉」の俳句というだけではな

土佐と鯉の俳句。手元「土佐の俳句」「土佐の俳句風土記」(共に高知新聞社刊)があり、後者の中で紹介されている土佐清水の俳人橋村潔史さんの「遺されし双眼鏡に鯉追ふ」(腰に灸すえて生涯鯉釣る)に深い感銘を受けた。

海底に黒田都あり鯉釣る

森本茶雷

茶雷は伊野出身の俳人。口伝えに、7世紀後半の「白鳳大地震」の際に黒田という一郡全部が海に沈んだという、まるでアトランティスの伝説のような話があるという。その海の上でカツオ漁が盛んに行われているという措辞で、土佐の大きな時空を表出した。

最も権威のある俳句賞とされる「蛇笏賞」の今年の受賞者に俳人協会の長老、深見けん二さんと現代俳句協会の副会長、高野ムツオさんが決まった。高野さんは宮城県在住で、東日本大震災に罹災。以来、「震災の今」を詠み続けている。

四肢へ地震ただ轟轟と轟轟と地震の闇百足となりて歩むべし
春光の泥ごとく死者の声
高野さんの句は、先の「黒田郡が消えた話」が遠い昔のことではないと教えてくれる。

先日、僕が幹事長を務めている追手前東京校友会が開催されたが、その席で校友の橋田俊彦気象庁予報部長(前地震火山部長)が「南海地震の切迫性や多様性」を語っていた。これは、「自助、共

われわれ都部の子にとつては、高知のお土産といえは「松魚つぶ」だった。小さな鯉で割って食べたニッキ味の鮓。何とも懐かしい。

(彦戸市出身、東京在住)

助、公助」という災害時の心得ととほに、警句としてきちんと受け止めなければならぬだろう。

◆松魚つぶの一句

さて、土佐と鯉の俳句。ついつい酒がらみの話になりがちだが、お菓子にも佳句があった。高浜虚子の高弟で代表的な女性俳人の一人となった中村汀女の一句。

かつおつぶ割れば輝き飛ぶ蜻蛉

この「かつおつぶ」は存知、明治以来の土佐銘菓「松魚つぶ」のこと。汀女は昭和20年代後半、「週刊朝日」と「婦人画報」に「ふるさとのお菓子」と題した俳句と随筆の連載をした。「婦人画報」に関しては、僕の大先輩たちとのコラボレーションということになる。

全国の銘菓12点を取り上げ、それぞれに一句を添えた。その中で「この国(土佐)では鮓のことをつぶと呼ぶ。それにしてもこれはなんと大きなつぶだろう」と書き、先の句を詠んだ。句だけでなく、江崎孝坪画伯の筆で、高知県民にはおなじみの、あの鯉節型の「つぶ」と小さな鯉の絵も添えられている。

われわれ都部の子にとつては、高知のお土産といえは「松魚つぶ」だった。小さな鯉で割って食べたニッキ味の鮓。何とも懐かしい。

(彦戸市出身、東京在住)

思い出

○…東京の大学に通っていたころ、渋谷の公園通りにじゃれたオゾンテラスのカフェがあった。とてもかっこよくて、「オウ」くて、素敵なおんなたちの場所になった。学

昔

○…ウナギは一応好きだが、どうしても食べたいかと言われると、そうでもない。子どもの頃、食べ過ぎたから。昭和40年代、四万十川中流域で子ども時代を過ごした。夏に